

誰もが持つ「何かおかしい、変えなくちゃ」に火をつけ 早く、広く波及する社会事業を支援したい

「社会起業」と和訳される「ソーシヤル・アントレプレナーシップ」の概念と呼称は、アシヨカの創立者ビル・ドレイトンの発想による。アシヨカは約30年間、波及力のある社会起業家を発掘し、支援し、繋いできた。本年1月には、槇加志波氏を代表とする日本支部が開設された。

ドレイトンが示した日本支部代表の人物像は、「ビジネスにも社会事業にも精通し、日本語と英語が堪能。そして人を動かす共感力（EQ）。『この人なら信頼できる。一肌脱いでやろう』と思わせる人物」という高いハードルだった。「そんな人いるの?」という疑問の声も上がる中、お互いに共感し代表に選ばれたのが槇氏だ。

世界中で社会を変革してきた フェロー・プログラム

フェローとは「社会を変革するポテンシャルのある個人」。誰もが持つ変革精神のお手本になり、勇気を与える社会起

業家たちだ。インターネット上で参加者の知識を集積し、無料の百科事典システムを作ったウィキペディアのジミー・ウエルズ。エチオピアコーヒーの商標登録をし、そのローヤルティーを100%農民の貧困解決に充てるロン・レイトン。白内障を患う貧しい人々への、人口眼内レンズ提供を実現したデヴィッド・グリーン。出稼ぎ移民の送金手数料を大幅に減らすシステムを作った、現在唯一の

日本人フェロー^{フェロー} 柘迫篤昌^{トセツトシ}など、世界70カ国・2700人以上のフェローが、独自のインパクトのある活躍をしている。

今の日本に必要なこと

現代社会では、社会事業を政府など官が、収益事業を民間企業が担っている。官の事業はどうしても収益力やスピード感に欠けることがある。収益を主目的とした民間事業では、格差や不公平が生

まれやすい。アシヨカと槇氏が目指すのは、官と民の谷間で伸びてきた市民セクター（NPOやNGO）の事業を強くすることだ。終戦直後の日本は、官も民も全部が社会事業だったと言つてよく、誰もが何とかしようとした力が、日本をもすごいスピードで復興させた。

「今、日本人の多くが再び（精神的）焼け野原にいます。そんな時だからこそアシヨカの意義は重要です。10年後は必ず社会が変わっています」と槇氏。

ユース・ベンチャー事業には 生涯学習開発財団も助成

フェローたちの共通点、それは子ども時代に「社会のために」自ら行動を起こした体験を持っていることだった。12歳〜20歳を対象に、何かを変えたいという自発的行動を促し手伝うのがユース・ベンチャー。日本でも昨年開始され、約50名が手を上げチャレンジした。当人だけでなく、その親、教師、同級生などに気づきの機会を与える効果もある。

生涯学習開発財団では、ユース・ベンチャーを社会に役立つ人材育成の貴重な事業と捉え、助成をしている。



か し わ

1年前まではアシヨカも社会起業という言葉もよく知らなかった槇氏。日本企業2社で海外展開を担った後、自ら発達障害児の支援事業をアメリカで起こす。企業で経験したビジネスの持つスピードや牽引力を社会事業にも活かしたいという。切れ者との前評判だったが、「語らずとも言わせる」ような、相手の想いを引き出す人間力を感じる人物だった。

■寄付のお申し出・お問い合わせなど
電話：03-3572-0467
E-mail：office@ashokajapan.org
ホームページ：www.ashokajapan.org

シリーズ
社会起業家

一般社団法人アシヨカ・ジャパン 代表

槇
加志波
氏に聴く